

原野の至宝

ハスカップの可能性を求めて



ハスカップの国内最大の自生地とされた勇払原野。主に苫小牧の東部に広がる原野には、かつて6〜7月のシーズンになると、多くの市民がハスカップ狩りに出掛けた。昭和40年代〜50年代にかけて苫小牧では、港の造成や企業立地が進み、開発と共にハスカップ自生地が急激に減少していった。

「昔は林の奥に入らなくてもいっぱいあったが、今は本当に少なくなった。栽培種は酸っぱくないから、焼酎漬けにするなら野生種が一番」。35年ほど苫東地域にハスカップを探りに来ている男性(85)は、容器いっぱい摘んだ果実を手にとり話した。

企業用地分譲の第3セクタ―苫小牧東部開発(現・株式会社苫東)は、企業立地と共に減少していくハスカップを

次代へつなぐ



15000株移植し、今も大切に保護されている。長くハスカップ自生地を調査する草苺さん(右)と小玉さん(左)

保存しようと、1973年頃から大プロジェクトを展開。ハスカップが特に多い区域への企業立地の決定に合わせ、市内静川の「つた森山林」へ

(性質)があるかもしれない。分布が広がり、土地の乾燥化が進んでいることが判明。乾燥化によるものなのか、ハスカップの一部が枯れている状況も確認した。

一方、千歳市にある群生地では、乾燥地でもハスカップが生育しており、生態には謎が多いという。

縮小しながらも、今なお勇払原野に残る自生地。ハスカップを取り巻く自然環境の変化に懸念を抱き、保全へ動き

草苺さんと共にかつてのハスカップの自生状況を調べているのが、苫小牧市美術博物館の小玉愛子学芸員だ。苫小牧の人たちにとって、食用資源としてだけではなく、精神的な側面からも重要なハスカップの存在を浮かび上がらせようと、市民への聞き取り調査にも当たっている。

これまでの調査を通じ、かつて中心部や桜木町、しらかば町など苫小牧のさまざまな場所に自生し、市民の暮らしと胸をなで下ろし、「自然の状態でそのまましておく場に深く根付いていたことも分かった。小玉学芸員は、ハスカップは生活の本当の宝。古くから苫小牧地方の勇払原野に自生するハスカップ。果実が持つ高い栄養と保健機能の面が目され、栽培種への利用、用途拡大の可能性などを探る研究も国内で進む。シリーズ「未来創生」第2部では、地域の宝ハスカップの保全、活用に挑戦する人々の姿を描く。5回連載。

勇払原野で自生、貴重な財産

市民の暮らしに根付く文化の源

始めたのがNPO法人苫東環境コモンズ(苫小牧)だ。同団体は前田一步園財団の「自然環境保全活動助成」を受けて2013年度から苫東地域で、「サンクチュアリ」と呼ぶ群生地の一部を対象にGPS(全球測位システム)使用の分布調査を続けている。調査の中で、ハンノキなど乾性土壌を好む植物の関心事。ただ、僕が思うよりそばにあり、苫小牧のアイデンティティ、文化の源でもあると感じている。自生地が少なくなった今、多角的な意味からの「ハスカップ」というものを次世代に伝えていくことが必要」と話す。

草苺さんを中心とした関係者は現在、自生地での一連の調査結果や、小玉学芸員が聞き取りしたハスカップにまつわる思い出話などをまとめた本の出版作業を進めている。

草苺さんは「ハスカップをまちづくりの中心に置いた活動をこれからどう展開していくかが重要」と、次代へつなぐ取り組みを模索する。

シリーズ「未来創生」第2部